

## 論文審査結果の要旨

氏名 千葉 敏之

本論文の対象となっている中世ヨーロッパ中東部の研究は、主としてドイツとポーランドにおいて、それぞれの国家形成過程を解明するという作業の中で、副次的に行われてきた。そのため、この地域は、これまで、ドイツの東部辺境もしくはポーランドの西部辺境という具合に位置づけられ、その枠組みの中で分析されてきた。本論文の著者は、このような近代国家成立史観に基づく見方を批判し、中世ヨーロッパ中東部の歴史を正しく認識するためには、この地域を固有の歴史空間として捉え直す必要があると主張している。本論文は、そのような問題意識に立ち、このヨーロッパ中東部が初めて一つの政治文化空間をなしたと考えられる紀元千年期（950～1025年）に焦点を当て、その成立の局面と新たに生まれた政治文化空間の構造を明らかにしようとしたものである。

著者は、論文前半で、紀元千年期のヨーロッパ中東部に関する現存史料を網羅的に精査し、紀元千年期に作成された史料群の生成地と生成時期に大きな偏りがあることを明らかにしている。そして、「聖性」をキーワードに皇帝・教皇・隠修士の行動を分析し、ヨーロッパ中東部が一つの政治文化空間として成立したと考えられる根拠を探り、その空間に共通していると考えられる君主同士が取り結ぶ関係のあり方を検討する。このような手順を経て、著者は、紀元千年期のヨーロッパ中東部は、伝道を最大の使命として復活したローマ皇帝権と、これとの協働によって再生した教皇権、そして修道院・教会の改革運動が高まるなかで高貴な出自をもつ知識階層を取り込んでいった隠修士＝伝道師という三者によって担われた、伝道的聖性構造を有する空間として構成されていた、と結論づける。論文後半では、この地域で生じた重要な政治的事件、すなわち、皇帝オットー三世がグニェズノに巡幸し、ボヘミア公ボレスラフに冠を被せた出来事に関する史料の再検討を行い、この事件が、周域に成立しつつあった超部族的政治体の首長が皇帝の統率する伝道空間へ参入し、そのなかで積極的な存在意義を主張していく転機としての意味をもった、と主張している。

このように、本論文は、現存する史料を精査して、これまで明らかにされていなかった紀元千年期中世ヨーロッパ中東部の政治構造を分析し、伝道の理念と実践によって結ばれた政治文化空間の成立の局面を詳細に検討したものである。

論文で用いるにはやや口語的と思われる表現が見られ、概念規定が十分でないため理解を困難にしている箇所はあるが、先行研究を踏まえた上で、年代記や証書など多くの一次史料に基づいてなされた議論は、博士論文として十分満足できる水準に達しており、歴史研究者として今後の実り多き研究生生活を予期させるものである。

よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。